

『看護学科と看護部との連携・協働による「がん看護実践者」育成プロジェクト』 の取り組み —活動と成果—

(がん看護／実践者／育成)

矢田昭子¹⁾・秦美恵子²⁾・大森眞澄³⁾・福永まゆみ²⁾・秋鹿都子¹⁾・
今岡恵美²⁾・森山美香¹⁾・荒木もも子²⁾・吉野拓未⁴⁾・岩谷とよこ²⁾・
玉田明子¹⁾・田中真美²⁾・井上和子¹⁾・三吉由美子²⁾・佐藤美紀子¹⁾・
妹尾尚美²⁾・宮本冬美²⁾・陰山美保子²⁾・竹本和代²⁾・日原千恵²⁾

The Approach of Educational Project “Oncology Nurse Practitioner” by the Collaboration With Department of Nursing and School of Nursing : The Activity and Results

(oncology nursing / practitioner / education)

Akiko YATA, Mieko HATA, Masumi OMORI, Mayumi FUKUNAGA, Satoko AIKA,
Emi IMAOKA, Mika MORIYAMA, Momoko ARAKI, Takumi YOSHINO, Toyoko IWATANI,
Akiko TAMADA, Mami TANAKA, Kazuko INOUE, Yumiko MIYOSHI, Mikiko SATO,
Naomi SENO, Fuyumi MIYAMOTO, Mihoko KAGEYAMA, Kazuyo TAKEMOTO, Chie HIBARA

【要旨】2013年に看護学科と看護部との連携・協働による「がん看護実践者」育成プロジェクトを立ち上げ、3年間が経過した。本事業の目的は看護学科と看護部が連携・協働することで、あらゆる年齢・生活の場・病気のステージを見据えた地域での暮らしと看取りを見据えたエビデンスのある「がん看護」の実践者（学部生及び大学院生、看護師、教員）を育成することである。そのために、研修会や事例検討会、地域との交流を目指したワールドカフェを定期的に開催した。さらに、がん看護に関連した学会への参加、最先端の医療施設の見学、臨床的課題の解明に向けた看護研究に取り組んだ。これらの取り組みは、看護基礎教育から卒後教育までの一貫したがん看護教育プログラム開発の基盤づくりとなった。同時に、看護学科と看護部の人事交流が促進し、がん看護の質の向上に寄与しつつある。今後も継続して大学教育と臨床実践が融合することで、がん患者とその家族に対して質の高い看護を提供することが可能になると考える。

I. 諸 言

がんの罹患数・死亡数は年々増加し¹⁾、がんの予防と早期発見、回復のための支援やがんサバイバーの就労支援などはわが国において最重要課題となっている。がん対策の『第二期がん対策推進基本計画』²⁾では、化学療法や放射線療法、緩和ケアの推進のために、「患者とその家族に最も近い職種として医療現場での生活支援にも関わる看護領域については、外来や病棟などでのがん看護体制の更なる強化を図る」と謳われている。このことから、外来や病棟において、小児から高齢者の多様なニーズをもつがん患者とその家族のQOLの向上をめざした看護を実践できる看護師を育成するこ

¹⁾ 島根大学医学部臨床看護学講座
Department of Clinical Nursing, Shimane University Faculty of Medicine

²⁾ 島根大学医学部附属病院看護部
Department of Nursing, Shimane University Hospital

³⁾ 島根県立大学看護学部
The University of Shimane, Faculty of Nursing

⁴⁾ 福岡女学院看護大学看護学部
Fukuoka Jo Gakuin Nursing University

とは、緊喫の課題である。特に腫瘍センター、緩和ケア病棟、緩和ケアセンター、放射線治療部、外来化学療法室などを設置しているがん拠点病院である島根大学医学部附属病院の看護部は、質の高いがん看護を提供し、島根県のがん看護のリーダーとして地域を牽引する役割がある。看護職は、がん医療が高度に進展する中、臨床現場で複雑・多岐にわたる問題を抱えているがん患者とその家族にかかわる機会が年々増加しているが、診断時からの緩和ケアの実践や全人的苦悩への関わりなどの看護実践に困難を感じている³⁾。また、学生も臨地実習でがん患者を受け持つことに対する不安を抱えていることが多い⁴⁾。この要因としては、がん看護についての看護基礎教育の不十分さと知識・技術の不足などが考えられる。これらを解決するためには、看護学科と看護部が連携協働し、看護基礎教育から卒後教育にかけて、単年でなく継続的にがん看護実践者を育成していく必要があると考える。そこで、島根大学の戦略的機能強化推進経費による看護学科と看護部との連携・協働による「がん看護実践者」育成プロジェクト（以下、プロジェクトとする）を申請し、採択された。プロジェクトを立ち上げてから3年間の取り組みの概要について報告する。

II. 活動の概要

1. 期間：2013年9月～2016年3月

2. プロジェクト組織

1) プロジェクトの責任者

- ①看護部：看護部長
- ②看護学科：臨床看護学講座教授

2) プロジェクトメンバー

- ①附属病院看護部：副看護部長、がん看護を実践している看護師長、副看護師長、がん看護専門看護師、緩和ケア認定看護師、がん化学療法看護認定看護師。
- ②看護学科：がん看護教育を行っている、あるいは関心がある教員。

3. 事業内容と期待される効果（図1）

1) 事業内容

(1) 看護学科と看護部が連携・協働し、地域での暮らしと看取りまで見据えたエビデンスのある「がん看護」の実践者（学部生及び大学院生、看護師、教員）を育成する。

- ①がん看護や緩和ケア、看護倫理に関する研修会の

開催

②事例検討会の開催

③地域との交流を目指したワールドカフェの開催

ワールドカフェの目的は、参加者が話し合いたいテーマについて自由に語り、お互いの思いや考えの拠り所となっている体験を共有することで相互理解を深めることである。

④臨床的課題の解決に向けた看護研究の遂行

⑤がん看護に関連した専門学会への参加

⑥最先端医療施設の見学研修

(2) 看護基礎教育から卒後教育までの一貫したがん看護教育プログラムの開発

2) 看護学科と看護部とが連携した取り組みの効果

(1) 看護部

- ①看護部全体のがん看護実践能力が向上することで、がん患者・家族に質の高い看護を提供でき、患者や家族の満足度の向上につながる。
- ②看護学科と連携したがん看護を学べる病院として、就職者数の増加が期待できる。

(2) 看護学科

- ①学部生のがん看護に対する興味関心が向上する。
- ②大学院生の研究活動が活性化する。
- ③教員の看護実践能力、研究能力が向上し、がん看護のエビデンスの構築に寄与できる。
- ④看護部と連携したがん看護学を学べる大学として、入学者数の増加が期待できる。

4. プロジェクトの運営方法

1) 会議について

(1) 会議の開催日程：原則として、毎月第3木曜18:00～19:00。

(2) 司会：看護部と看護学科助教以外が輪番制で担当する。

(3) 書記：看護学科助教が輪番制で担当する。

(4) 会議開催通知

その月の司会者は開催通知案を作成し、プロジェクトの責任者にメールで相談し、了解を得てから開催通知をメンバーに配信する。

(5) 議事録

議事録は書記が作成し、司会者と確認後、メンバーに配信する。

2) 事例検討会について

(1) 担当者は第1回会議で決定し、メンバーは看護部と看護学科3名以内で構成する。

(2) 事例検討会開催準備

- ①担当者は行事などをふまえて日時を決定する。

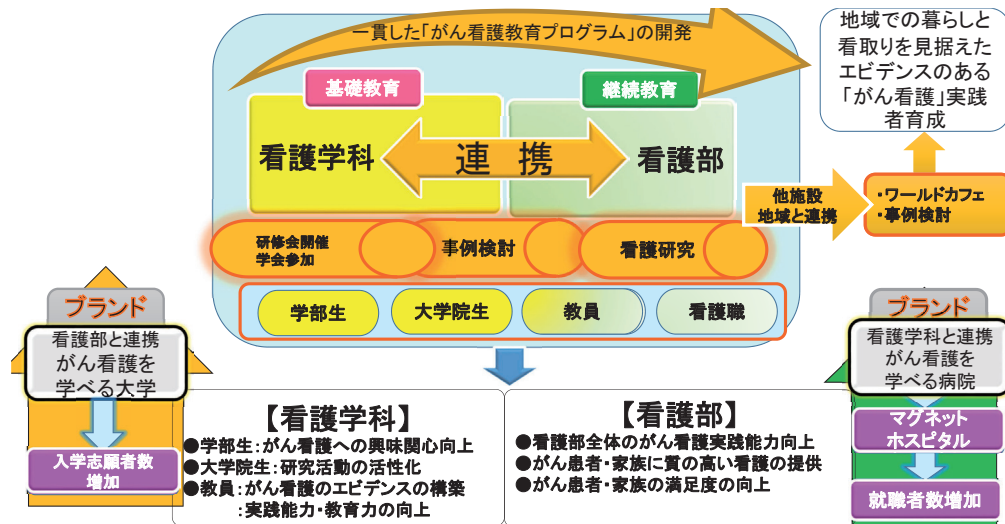


図1 看護学科と看護部との連携・協働による「がん看護実践者」の育成

- ②担当者は事例募集のポスター案を作成し、会議等で検討し最終案を作成する。
- ③看護部や看護学科に配布し、事例を募集する。
- ④事例検討の申し出があった場合は、倫理的配慮をした「タイトル」をつけたポスターを作成し、会議やメール等で検討し、最終案を作成する。
- ⑤看護部や看護学科に配布し、参加者を募集する。
- ⑥アンケートの準備（ひな形は統一）

(3) 事例検討会当日

①会場設営

②事例の準備

- ・事例はA4用紙1枚程度にまとめ、事例検討会終了後回収と明記する。
- ・内容は事例紹介、事例検討会で検討してほしいことなど記載する。
- ・配布事例には番号をつけ、事例検討会終了後に回収し、確認する。

③進 行

- ・担当者が司会進行をする。
- ・終了時、参加者全員にアンケートに記入してもらう。

3) 研修会について

- (1) 担当者は、企画案をもとにプロジェクトの責任者と相談しながら講師交渉をする。
- (2) 担当者は、講師が確定したら、ポスター作成案を作成し、会議等で検討し、最終案を作成する。
- (3) 担当者は、研修会の案内文とポスターを島根県内の病院や訪問看護ステーションなどへ郵送する。
- (4) 担当者は、役割分担表を作成し、担当を会議で決

定し、円滑に開催する。

4) 事例検討会や研修会後の報告

担当者は会議でアンケート結果と総括を報告する。

5) 報告書の発行

年度毎に研修会や事例検討会の概要、アンケート結果、総括などを網羅した報告書を発行し、看護部、看護学科に配布する。

III. 3年間の活動内容

1. がん看護や緩和ケア、看護倫理に関する研修会の開催

研修会はがん看護の最新情報をふまえて、がん看護を実践するために必要な知識、技術、態度を習得し、現象をとらえる力を養うことができるテーマで企画し、3年間で6回開催した。講師は理論と実践が講義できる人材に依頼した。研修会の内容は講義とグループワーク、講義と事例検討など、より実践で活用しやすいように工夫した（表1）。

2. ワールドカフェの開催

都道府県がん診療連携拠点病院として県内の他病院や地域の看護職との交流を促進し、島根県全体のがん看護の質向上を図るために、3年間に2回開催した。内容は、化学療法を受ける患者の看護や患者の暮らしを支えるケアについて語り合った。方法は、1グループ4～6人でグループを編成した。テーマについて1ラウンド20分間で、参加者が普段思っていること、過去の体験、会話を通して思ったことなどを語り合い、最

後に各グループの代表者1名に意見交換の内容や感想を
発表してもらった(表1)。

3. 事例検討会の開催

臨床で看護介入に難渋している事例、あるいは難渋
した事例を募集し、3年間で10回開催した。そのうち
1回は、早急のコンサルテーションを要するため、病
棟に出向いての出前事例検討会であった。開催は参加
しやすい18:00～19:30の90分間とした(表1)。

4. 臨床的課題について看護研究の遂行

2テーマについて看護研究に取り組んだ(表1)。

- ①化学療法を受ける患者版「プレパレーションツ
ール」の開発
- ②がん看護に卓越した看護師の看護実践に関する研
究

5. 見学研修

(1) 目 的

日本では1974年頃から同種造血幹細胞移植(以下移
植)が開始された。現在、国内では年間約4,000件の移
植が行われている。2012年度診療報酬改訂により、「造
血幹細胞移植後患者指導管理料」が新設され、看護師
に関する基準として2018年度までに同種造血細胞移植
後フォローアップのための研修の修了、フォローアッ
プ外来開設などが必須事項となった。そこで、実際の
移植医療現場を見学研修し、専門的な移植看護の実際
を学び、同種造血細胞移植患者のフォローアップ外来
開設に向けての基礎的資料とした。

(2) 内 容

- ①研修機関：厚生労働省認定の名古屋第一赤十字病
院造血細胞移植センター
- ②研修期間と人数：研修期間は3日間、研修者は移
植看護に携わるプロジェクトメンバー2名
- ③研修の内容
 - ・病棟：感染管理への取り組み、患者指導マニュアル
等、チームカンファレンス、口腔ケア回診などの
見学
 - ・外来：サポート外来、フォローアップ外来の見学

6. 看護基礎教育から卒後教育までの一貫したがん看 護教育プログラムの開発

看護基礎教育では、2年後期開講(必修)の成人看
護学概論でがん患者の行動や心理状態を理解できるよ
うに危機理論やストレスコーピング理論、自己効力感
理論、アンドラゴジー理論(成人教育学)、慢性疾患の

病みの軌跡理論などの中範囲理論を自己学習、グルー
プワーク後に発表し、理解が深まるようにしている。
3年前期開講(必修)の成人看護学援助論Ⅱ(慢性期)
では、がん看護専門看護師や緩和ケア認定看護師、が
ん化学療法認定看護師による講義、がん患者の事例を
展開することで、理論と事象を統合できるようにして
いる。3年後期開講(必修)の成人看護学実習Ⅱ(慢
性期)ではがん患者の全人的苦悩に対して中範囲理論
を活用しながらアセスメントし、患者に応じた看護実
践を学習できるように教育をしている。また、1日緩
和ケア病棟の見学実習も行っている。

4年後期開講(選択)の緩和ケア論では、グルー
プワークで体験を語り合うことで死生観を深めながら、
困難にとらえた事例について事例検討を行っている。
看護基礎教育と臨床との乖離の減少を目的に、がん体
験者の語りや臨床現場の看護師によるエビデンスのあ
る看護実践の講義も取り入れ、4年間の体験と知識や
技術を統合できるように工夫している。

卒後教育では、島根県全域に研修会やワールドカ
フェ、事例検討会に参加できるように案内を出してい
る。

IV. 成 果

1. 研修会

参加者数は3年間で延べ476名であり、そのうち学生
は145名であった。参加者のアンケート結果より、看護
師は、「講師の先生が話された患者さんの言葉を聞き、
普段自分たちが患者さんの思いと声を聞き逃し、読み
間違えていたのではないかとハッとしました。少し辛
かったなと思いました。今後実践でいかしていきたい
と思いました」、学生は、「今までがん患者さんに関わ
る機会が少なく、経験がありません。だからこそ、『が
んって何だろう、がん看護・緩和ケアって何だろう』
というところから始めている状態です。今日の講演を
聞き、涙が出そうになるくらい心に刺さりました。私
の中でがん看護に対する視野が非常に広がりました」
などの感想があった。看護学生は研修会に参加するこ
とで教科書では学べないがん看護を知り、関心が高ま
ったと考える。

島根県は東西に長く、離島をかかえていることから
利便性が悪く、看護職が研修会に参加しにくい現状が
ある。そこで、島根大学医学部での開催を目指して、
大学の助成金を獲得し、日本国内の著名な講師を招聘
した。その結果、島根県全域のあらゆる施設の看護職
の参加があったことは、がん看護の質の均一化に貢献

表1 事業内容

| 年度 | 事業 | 内容 |
|--------|-----------|---|
| 2013年度 | 研修会 | <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで考える看護倫 (神戸市看護大学 川上由香氏) ・がん患者の退院支援と看護者の役割について (YMCA訪問看護ステーション・ピース 濱本千春氏) ・倦怠感の生じるメカニズムと治療・ケアの実際について (聖路加国際病院 櫻井宏樹氏、東京都健康長寿医療センター 古井奈美氏) |
| | 事例検討会 | <ul style="list-style-type: none"> ・抗がん薬治療を選択した高齢がん患者の意志決定への支援 ・「残される義父母と子どもをかかえて今後どうしていいかわからない」と繰り返す患者の妻への支援 ・予後告知をされたがん患者とその妻と学童期の子どもに対する支援 (出前事例検討会:病棟から依頼があった時にメンバーがでかけて検討) |
| | 学会参加 | <ul style="list-style-type: none"> ・第28回日本がん看護学術集会 |
| 2014年度 | 研修会 | <ul style="list-style-type: none"> ・がん患者の“その人らしく生きる”を支える看護 (京都大学 田村恵子氏) ・患者・家族・職員を支える3Dサポートチームの取り組み～立場の違う人と人との隙間を埋めるための実践～(相澤病院 赤沢雪路氏) ・島根大学発！ワールドカフェ～がん化学療法を受ける患者さんの看護について語り合おう～ (松江市立病院 東堤慶子氏、益田赤十字病院 福原美智子氏、大田市立病院 池本由紀子氏、島根大学医学部附属病院 渡部あゆみ氏・楨原貴子氏) |
| | 事例検討会 | <ul style="list-style-type: none"> ・どのようにコンサルトすればよいか悩んだ事例～療養場所をめぐる看護師の葛藤～ ・食べられない進行食道がん患者への看護～「食べられるようになるかな」と問いかげられ困った事例～ ・認知機能の低下がみられるがん患者の意思決定について ・看護ケアを拒否する終末期がん患者への対応 |
| | セミナーや学会参加 | <ul style="list-style-type: none"> ・第29回日本がん看護学術集会 ・緩和医療学会のセミナー |
| 2015年度 | 看護研究 | <ul style="list-style-type: none"> ・化学療法を受ける患者版「プレパレーションツール開発」 ・外来通院中のがん患者に対する外来看護師の看護実践に関する研究 |
| | 研修会 | <ul style="list-style-type: none"> ・AYA世代のがん患者についてともに学ぼうin島根 (甲南女子大学 丸光恵氏) ・ライフサイクルの視点からがん患者の暮らしを支えるケアについて (島根大学 大森眞澄氏) ・島根大学発！ワールドカフェ:ライフサイクルの視点からがん患者の暮らしを支えるケアについて語り合う(島根大学 大森眞澄氏) |
| | 事例検討会 | <ul style="list-style-type: none"> ・「終末期の退院支援」～怒りに変わった妻のことばから振り返る～ ・成人前期にある終末期がん患者のQOLと家族への看護支援に関する困難な事例 ・告知後気持ちの落ち込みが続く患者への意思決定支援～周囲の意見に翻弄される患者の真の希望とは～ |
| 2015年度 | 他施設研修 | <ul style="list-style-type: none"> ・島根大学造血幹細胞移植看護の強化に向けて名古屋第一赤十字病院で研修(3日間) |
| | 看護研究 | <ul style="list-style-type: none"> ・化学療法を受ける患者版「プレパレーションツール開発」 ・外来通院中のがん患者に対する外来看護師の看護実践に関する研究 |

できたと考える。

2. ワールドカフェ

参加者数は延べ66名であった。参加者のアンケート結果では、「他病院の方とお話ができて、実践に活かせるようなアイデアを得ることができました。また、自

分が難しいと日頃思っていることに同意してくれる人がいて、同じなんだなと思って嬉しかった。また頑張っていきたいと思います」「連携という言葉の意味、自分はどの動いているのか、他の施設はどうして欲しいのか知ることが大切だと思い、他の施設の人の話が聞けて良かった。自分も発信力を持たなくてはと思いまし

た」「病院での取り組みが分かったので、在宅の場からも関わりたいと思う」などの感想があった。

島根県全域の様々な組織からの参加があった。参加者はテーマについて様々な組織の看護実践を聴いたり語ったりしながら、知識や経験を融合していた。自分の看護を振り返ると同時に、新しい看護を発見する機会にもなった。組織を超えて集うワールドカフェの開催は、島根県全体のがん看護の底上げにつながったと考える。

3. 事例検討会

参加者数は延べ212名であった。事例提供者は、「検討したい内容以上に、この患者さんのことを考えられた。また、多くの助言・アドバイスをもらい次に生かしていきたいです」、参加者は「何かを解決してあげてことを考えてしまうけど、患者さんの気持ちに寄り添うということがどれだけ大切か改めて考えることができました」などの感想があった。

事例検討会では、単一の部署で解決できない困難事例を取り上げ、他部署の看護職や看護教員が垣根を越えて集い、知恵を出し合いながら検討した。その結果、参加者は多角的視点で事象を捉え、看護の原点に立ち返る機会になった、新たな看護介入方法を見出すことができたなどの多くを学ぶことができた。さらに、参加者が困難事例に対して新たな看護介入方法を実践したことで、問題が解決できた事例もあり、看護部全体のがん看護の質向上に寄与できたと考える。また、事例検討会の司会はプロジェクトメンバーが行い、事例を提供した部署のメンバーが安心して語ることを保障しながら取り組んだ。困難な体験は、個人や病棟の問題として片付けられるのではなく、参加者の誰もが共感し、サポートティブであったことから事例提供者の心理的なサポートにもつながった。継続的に事例検討会を行ったことの効果は、参加者が積極的に事例を提供する姿勢にも現れた。このように定期的な事例検討会が継続して実践できたことは、語り、受け止め、フィードバックする基盤が育成されたのだと考える。

4. 看護研究

1) 化学療法を受ける患者版「プレパレーションツール」の開発

在院日数が短縮していることから、看護師は抗がん薬治療を受けるがん患者に対して、退院後を見据えたセルフマネジメント教育を行うことが課題である。そこで、初めて抗がん薬治療を受ける患者に対して、入院時から退院後までの暮らしを見据えたDVDとパンフ

レットを次の通り作成した。今後は患者にDVDを視聴してもらい、活用状況を調査する予定である。

(1) タイトル

抗がん薬治療を受ける患者さんとご家族へのトータルケア

(2) 内容と時間

①抗がん薬治療について学ぼう (11分22秒)

②抗がん薬治療について学ぼう (通院治療編) (5分18秒)

③抗がん薬治療の副作用とその対処編 (15分16秒)

④家での暮らし方編 (3分53秒)

⑤日々の暮らしで困った時の対処編 (6分12秒)

⑥家族の皆さんへお願いしたいこと編 (3分13秒)

2) がん看護に卓越した看護師の看護実践に関する調査研究

外科外来看護師に面接をし、質的帰納的に分析した。第31回日本がん看護学会学術集会(2017年2月開催)で採択され、発表予定である。

5. 施設見学研修

見学研修したことで、患者が移植を意思決定した時点から、感染予防を習慣づけることの必要性や、病棟から外来まで継続したフォローアップをするための環境調整、記録などのシステムについて多くの示唆を得ることができた。

6. 看護基礎教育から卒後教育までの一貫したがん看護教育プログラムの開発

看護基礎教育では、がん看護に関して講義や演習、実習を行うことで、学生は「講義や演習内容が初めてつながった」「ふに落ちた」などの発言から、がん患者の看護実践を理解することにつながった。緩和ケア論では、「死生観を初めて深く考えた」「今まで理解できなかったことがやっと理解できた」などの感想があり、がん看護に関する知識や技術、態度を習得できるようになったと考える。また、がん看護に関して関心が高まり、がん看護に関する卒業研究や、看護学総合実習Ⅱで緩和ケア病棟を選択する学生が増加しつつある。

卒業後はこのプロジェクトの研修会や事例検討会に参加することで、看護基礎教育での学びをふまえてがん看護を学び続けていた。

以上のことから、がん看護について看護基礎教育から卒後教育まで一貫した教育プログラムの開発の基盤ができた。今後は看護基礎教育では、早期から体験者から学ぶ機会や死生観を考え続けることができる教育を検討する必要がある。卒後教育では、看護基礎教育

をふまえて、日本がん看護学会が提示する「がん看護コアカリキュラム」を基本にして、がん看護に必要とされる専門的な知識や技術の習得が必要である。今後は、多様ながん患者とその家族に看護介入できるように、事例を丁寧に振り返りながら事象の客体化や、事例検討会や研修会に参加し、新たな知識や技術を身に付けることができる教育を検討する必要がある。

7. プロジェクトメンバー

看護部の看護職は「事例検討の方法や研修会の運営について学ぶことができた」「改めて日々の看護を振り返ることの大切さに気づくことができた」、看護学科の教員は「看護学科と看護部との距離が縮まり、多くのスタッフとつながりができた」「現場のことがわかったことで、教員自身の実践力が高まり、効果的な学生指導に活かせる」などの感想があった。これらのことから、看護学科の教員と看護部の看護職との交流が深められたこと、がん看護についてそれぞれの立場から意見を出し合っただけでなく、企画運営できたことで、臨地実習を中心とした臨床現場と教育現場の関わりを超えて、がん看護実践者育成の基盤ができたと考える。

V. 事業の総括と今後の課題

医療を取り巻く環境がめまぐるしく変化する中で、看護の対象の複雑で多様なニーズに対応する力が求められている。そのため、臨床実践者と大学の教育者が協働して看護を創造することで、患者と家族のニーズに対して適切に対応できる看護職を育てていくことが重要である。

本プロジェクトで、2013年から3年間、看護学科と看護部とが連携・協働しながら研修会、ワールドカフェ、事例検討会の開催、看護研究を継続して取り組むことができたことは、大きな成果であった。継続した取り組みを可能にした要因は、プロジェクトメンバーが一体となり、月1回の会議で研修会、ワールドカフェ、事例検討会の企画案を詳細に検討し、協力体制を強化

したことであったと考える。その結果、参加者は、研修会では最新のがん看護に関する知識や技術について理解を促進し、ワールドカフェでは体験を共有したことで自分の看護を見つめ直し、新たな看護実践方法を見出すことができた。さらに、事例検討会を定期的に開催したことで、参加者は自身の看護を振り返り、全人的苦悩を抱えたがん患者とその家族に向き合いながら、多様なニーズに応じた看護実践を主体的に取り組むことができるようになった。また、臨床的課題について看護研究に取り組んだことで、がん患者とその家族に対する看護実践の質向上に寄与しつつある。

以上のことから、本プロジェクトは長年にわたって培われてきた病院看護部と看護学科の関係性をベースにスタートし、様々な活動を通して両者の組織的な連携・協力体制が強化されたと考える。

今後も、このプロジェクトによって研修会や事例検討会、ワールドカフェの開催、看護研究を単発ではなく、継続して取り組むことが重要である。今後の課題は、島根県内の看護職及び他職種が垣根を越えて交流しながら、質の高いがん看護実践者を、看護基礎教育から卒後教育にかけて一貫して教育できるプログラムの開発とその実践および評価である。

文 献

- 1) がんの統計編集委員会. がんの統計2015年度版. がん研究振興財団; 2016.
- 2) 厚生労働省. がん基本政策. http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/gan_keikaku.html. (アクセス日2016. 8. 1).
- 3) 小幡明香, 直成洋子, 原島利恵. がん患者の看護についての困難感に関する研究の動向 看護師を対象とした国内文献に焦点をあてて. 茨城キリスト教大学看護学部紀要 2016; 7 (1): 11-18.
- 4) 飯野京子, 岡本隆行, 小熊亜希子, 他. 看護基礎教育における「がん看護学」に関する教育評価. 国立看護大学校研究紀要 2008; 7 (1): 50-59.

(受付 2016年9月1日)

